

学者馬鹿には書けぬ本

松原正

「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ、花を買ひ来て、妻としたしむ」、石川啄木の歌である。陰気で腑甲斐無い、頗る日本人的な歌である。なぜか。神沢惣一郎氏は近著『情念の形而上学』第四章第二節を「愛憎を超えるもの」と題しているが、そういう愛憎を超えたいという欲求が吾々日本人の場合は甚だ稀薄だからである。再び、それはなぜか。むろん愛と憎しみを徹底する事がないからである。日本人は「和をもって尊しとなす」からである。渡部昇一氏は『歴史の読み方』の中で、大学紛争当時、「全共闘に味方した教授」たちが、全共闘が崩壊した後も大学を辞めずに済んだのは、こういう和を重んじる「大民族の風格」のせいであると書いている。渡部氏は大真面目なので皮肉を言っている訳ではない。「大民族の風格」とやらを喜ばしいと氏は本気で思っているのである。が、私は渡部氏のような考え方を採らない。神沢氏は「現代の学生が墮落したのではなく、不正を処罰しない大学と教員に責任があり、その怯懦こそ批判されなければならないし、彼らが学生の罪を助長している」と書いているが、その通りであって、渡部氏のように大真面目で日本人の和を重んずる習性を持ちあげるのには甚だ危いと思う。

和を重んずる日本人は許し合う事を大事にする。「許す」とは「緩くする」事である。大学に限らない、万事緩くする社会、それが日本人の社会なのだ。吾々は徹底して他人を憎むという事をしない。そして憎まれる事のない社会で憎みつづけるのは至難の業である。啄木も「顔あかめ怒りしことが、あくる日は、さほどにもなきをさびしがるかな」と歌っている。冒頭に引いた啄木の歌にしても、友がみな自分を憎んでいるという状況で、「花を買ひ来て妻としたしむ」というのならまだしもであって、陰気な感じは減ずるのだが、啄木の場合は、いや、日本人の場合は、「友がみなわれよりえらく見ゆ

る」くらいの事を悲しんで歌を作るのであって、友人が偉く見えるから、友人を蹴落してでも偉くなろうなどというふうには決して考えない。

言うまでもなく、日本は再び鎖国をする訳にはゆかないのである。そして西欧人は正義のためには血を流すのである。それゆえ徹底的に憎まれる事の無いところで憎むのは至難の業であるとはいえ、少くともなぜ吾々日本人が「憎みきれないろくでなし」なのかという事くらいは知っていなければならない。神沢氏は書いている。

マスコミをはじめとして政治家も法律家も刑を強化することは、人権を侵害することであるかのように看做し、ヒューマニズムに反すると考えている。すでに海保青陵が指摘した如く律を強化することは酷吏と思われ、法をゆるめることが仁者や善人と思われている。つまり彼らは市民の人権を本気になって守ろうとせず、大衆に媚び、ヒューマニズムの美名を求めている。しかしヒューマニズムは人間の弱さ——劣等感、卑屈、怠惰、無責任、我儘、非行、犯罪等——に媚び、これに理解を示すことではない。これは市民のエートスを弱体化し、彼らを墮落させてしまう。

ドイツの哲学者カール・レヴィットは書いている、「日本人は二階建の家に住んでいるようなもので、階下では日本的に考えたり感じたりするし、二階にはプラトンからハイデッガーに至るまでのヨーロッパの学問が紐に通したように並べてある。そしてヨーロッパ人の教師は、これで二階と階下を往き来する梯子はどこにあるのだろうか、と疑問に思う」（『ヨーロッパのニヒリズム』柴田治三郎訳）。甚だ辛辣だが甚だ的確な診断だと思う。日本の学者の大多数は二階にヨーロッパの天才を住ませ、自分は一階にいて義理人情と許し合いの生活をして全然怪しむ事が無い。学者の書く文章が恐ろしく退屈なのはそのせいである。そしてまた例えばキリスト教の精神主義に反抗するD・H・ロレンスについて講ずる教授が、教授会の偽善的な精神主義に耐えられるのもそのせいである。それゆえ社会主義をあれほど軽蔑したニイチエを講ずる教授が、社会党に投票する事もある。人間の愚昧に苛立ち、狂気に至るまでに人間理性を過信したスウィフトを講ずる教授が人情家だったりする。それはなるほど西欧人からすれば理解に苦しむ現象で、「二階と階下を往き来する梯子はどこにあるのだろうか」という疑問を彼らが持つのは当然の事だろう。

神沢氏の著書を読んで私が一番感心したのは、氏がそういう日本の学者の通弊を知っていて、二階と一階とを「往き来する梯子」を絶えず求めているという事である。神沢氏は私よりも少しだけ温厚で、私よりも少しだけ円熟しているから、あまり過激な言辭を弄してはいないが、レヴィットの指摘した日本の学者の通弊に、神沢氏もまた苛立つ事が多いに違い無いと思う。神沢氏は哲学者だが、「情念の形而上学」を論じて、氏は日本の現実を忘れる事が無い。アリストテレスを論じても、マルクスを論じても氏は常に日本人がアリストテレスやマルクスを論じているという事実を忘れない。例えば第二章「同情と憤慨及び嫉妬」において、神沢氏は九郎判官義経を語り、倭建命を語り、田沼意次、吉良上野介を語り、やがてソクラテスとイエスを論じているが、巧妙な語り口に魅せられて読み進むうちに、読者は次のような文章で止らざるをえなくなる。

吝嗇で意地の悪いといわれている男が、近松の世話物を見ながら、舞台上演じられる強欲な主人に憤慨し、虐げられている男女に同情し、浪花として涙を流している姿を見かけることがある。だがこれは嘘泣きではない。彼らはほんとうに忍びないので泣いているのである。これはテレビの女性番組で女の司会者が憐れな話を聞いて顔をしかめたり、嘘泣きしていることとは異なる。彼は偽善者ではない。ところが彼は劇場を出た途端にそのことをすっかり忘れてしまい、他人に意地悪し強欲なことをする。人間は平気でこの矛盾を行なっている。だから同情や憐れみの情念が強いからといって、そのことだけで人が倫理的であり、善良な人間であるという証拠にはならない。むしろよくない人間ほど涙っぽいところがある。

こういう事を書ける学者には現実がよく見えているのである。右に引いた文章につづけて神沢氏はデカルトの『情念論』に触れているが、デカルトを知っているから近松の世話物を見て泣く男と女性司会者の偽善を区別できるのであり、日常生活でその二つを区別できるからデカルトを理解できるのである。つまり、デカルトを知るという事は、デカルトを日本の現実に適応できるという事、或いは適応できない場合は適応できない理由を知る事なのだ。そういう事が理解できない学者馬鹿は、恐らく神沢氏の著書を読んで、「高尚な」デカルトと卑俗なテレビの司会者とが同時に論じられている事を軽蔑するかも知れぬ。T・S・エリオットは「現代人はスピノザを読みながら恋愛をする」

と言ったが、学者馬鹿はスピノザを論じても恋愛はしないものらしい。人間は生殖器を持っている。それを忘れる危険をモンテーニュは指摘しているが、古来、大思想家と呼びうる天才で、生殖器の存在を忘却した者は一人も無い。人間は皆生殖器を持っている。それなら人間のやる事に、高尚であれ卑俗であれ、哲学者は関心を持たなければならぬ。高尚な事しか考えない学者の文章に説得力がある筈は無い。周知の如く、ソクラテスは一冊の書物も書かなかった。が、プラトンの対話篇に登場するソクラテスは尋常一般の市民として語っているではないか。

私事に亘るが、大学紛争当時、私は学生担当教務で、神沢氏は学生部長であった。私は神沢氏よりも少しだけ円熟していなかったから、過激派の学生と渡り合って猪突猛進、拳句の果てに玉砕したが、神沢氏は立派にやり抜いた。両者の懸隔は甚だしい、少しばかりの違いではない、と人は言うかも知れぬ。が、そう思うのは日本人の通弊を知らないからである。あれほど騒いで、大学紛争は何を残したか。大学は少しも変わっていない。してみればあれは馬鹿馬鹿しい空騒ぎ、戦争ごっこだったのである。そして戦争ごっこの遂行に円熟もへちまもありはせぬ。玉砕した馬鹿が馬鹿か、学生のシンパになって保身を図った馬鹿が馬鹿か、それを論ずる事さえ空しい事なのである。

だが、すでに述べたように、西欧人は正義のためには血を流す。彼らに対しては日本の温情主義は通用しない。それに、石油が手に入れられなくなれば、渡部昇一氏の言う「大民族の風格」なんぞ忽ちふっ飛んでしまうだろう。それゆえ、日本をほろぼさない事が大事なら、神沢氏の言うように「人倫現象の根底には応報の原理が働いている」という事実を、我々は知らねばならぬ。日本人は度し難いくらい日本人であって、それは或る程度仕方無い事である。が、日本人が応報の女神ネメシスを理解できなければ日本は亡びるしかない。西欧は応報を重んじる。目には目、歯には歯という原則を忘れられないのが西欧人なのだ。それが解っているから神沢氏は「廃址の中に埋れていた女神ネメシスを掘り起こし、これを最高の祭壇に祭」ったのである。実は私もそのうち、神沢氏よりも少しだけ過激なやり方で、同じ事をやろうと考えている。それゆえ、この少しだけ温厚な先輩の著書からは教えられるところが多かった。著者に感謝すると同時に、江湖にひらくすすめたいと思う。